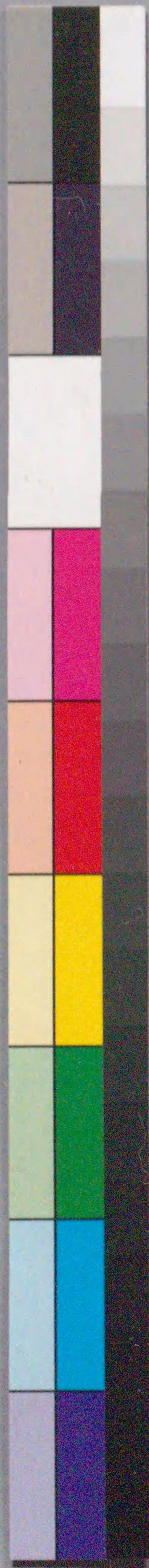


百人一首戯講釈

207
328





207
328

芝金交作

芝金交作
京傳校合

百人一首戲講譯
三丹物
上



芝金前
泉市板

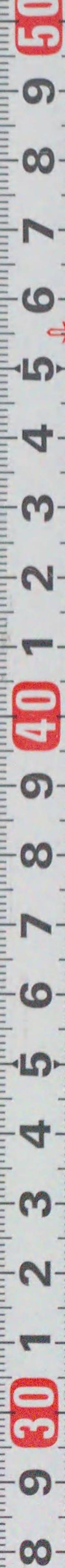


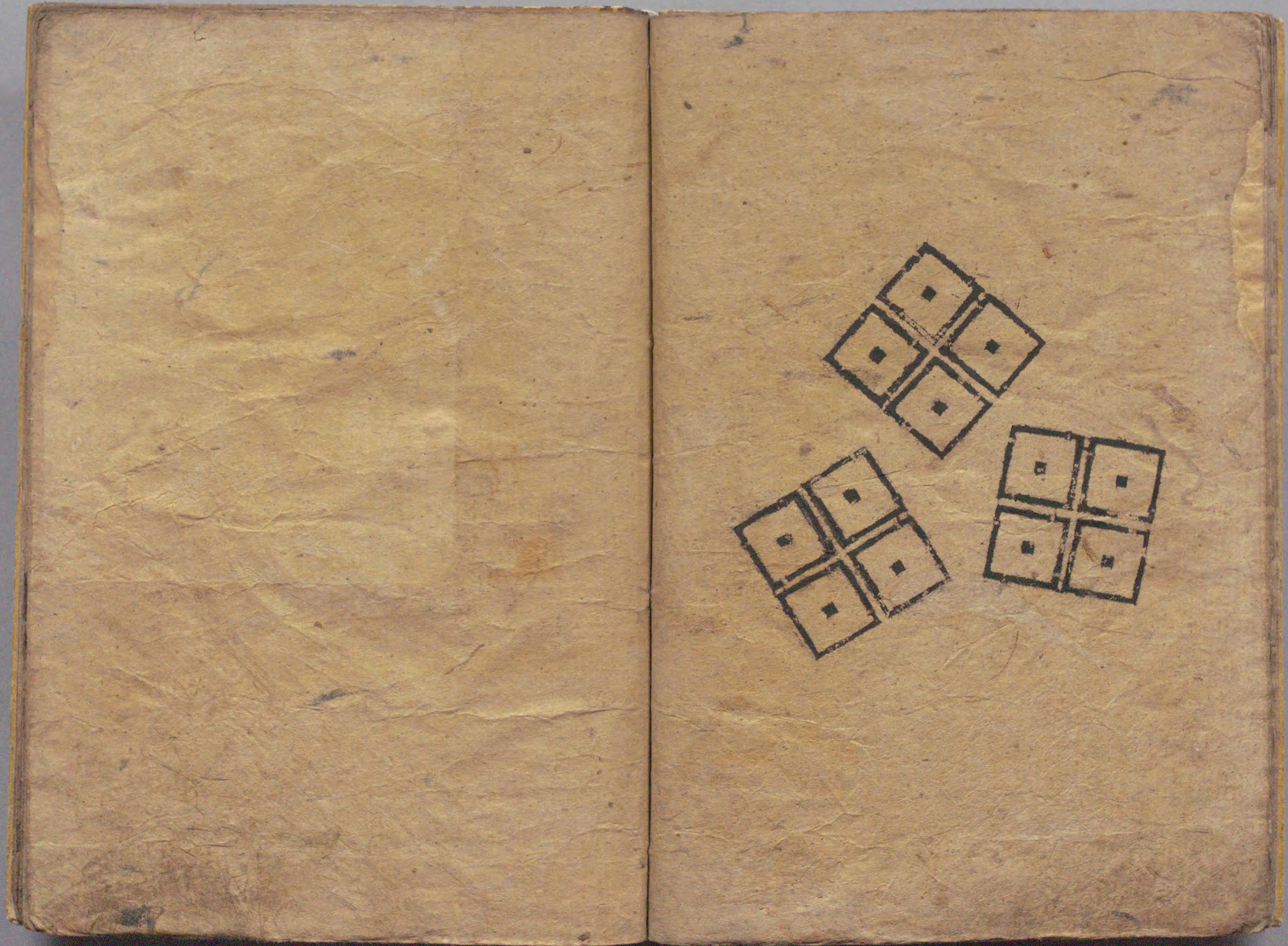
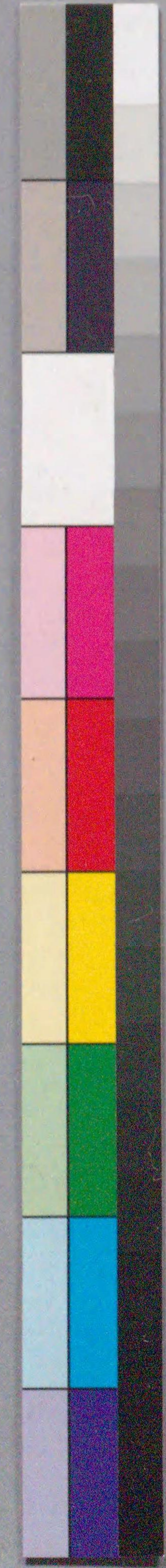
夫百人一首へ定家々小倉山よ書わつる免のあひ
 百文眞朱へ生姜糖小倉野へ買喰いしるあふ
 夫へ歌書是の菓子お菓子喰つてとさふられぬが
 草丹子お大意ありと軒屋の頼をぬ入流し青の
 作もいやく本れ作もいやく蕎麦及切素麵喰ひ
 さいかと下甲と防中せざとさうあのか孔明が辨廬子
 三度通ひは如く是非をいひせぬ義理ほく知
 名代さるるお客の如くお氣の毒くおぼんをま
 細屋のあふりいりてせんかて概まうち向八
 野即ち人丸るやうまららるちあんと笑そり
 とりてころし玉次おぶらちやべちやちやくとまのいふ

芝 全交題





















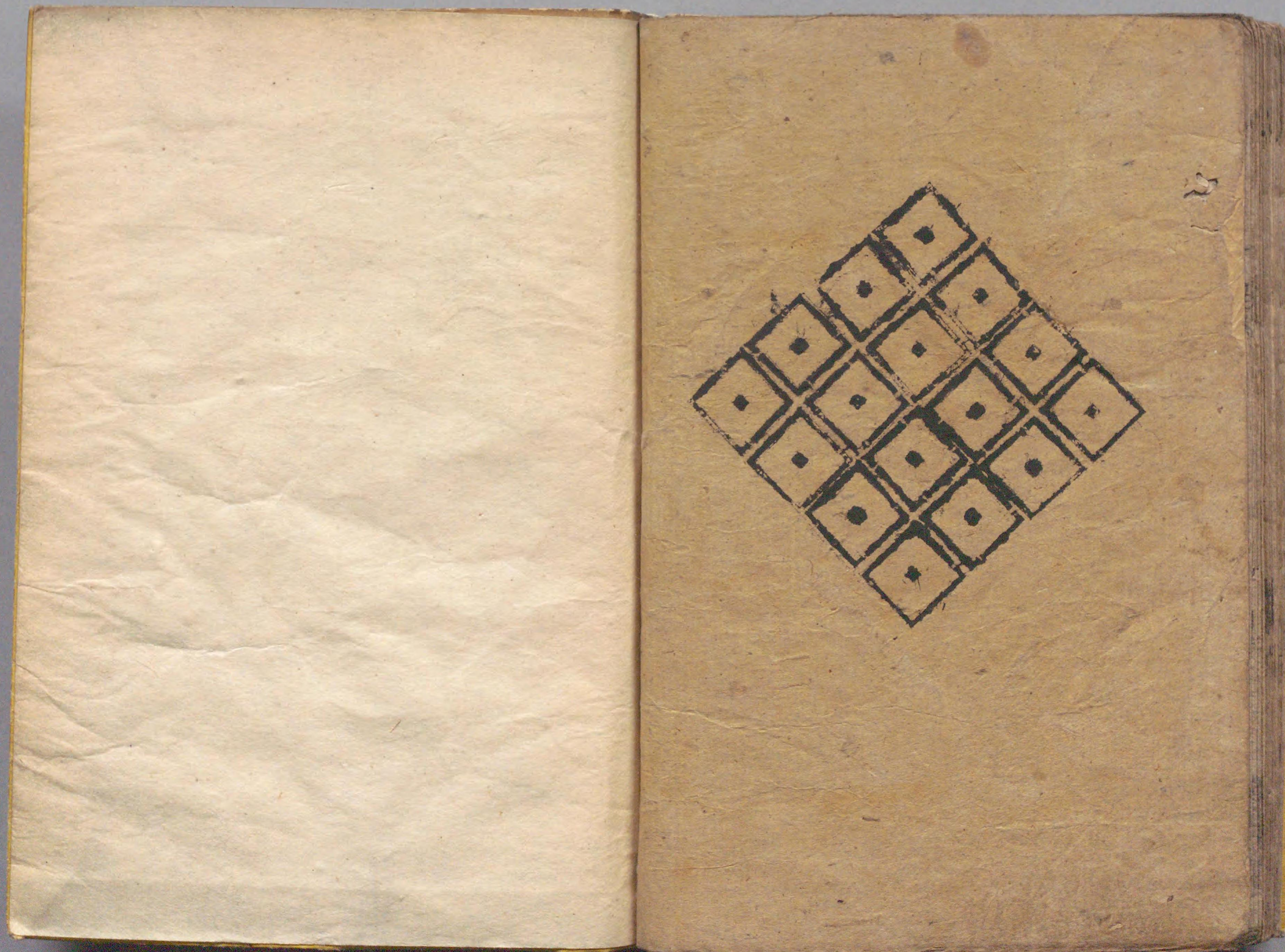
207
328

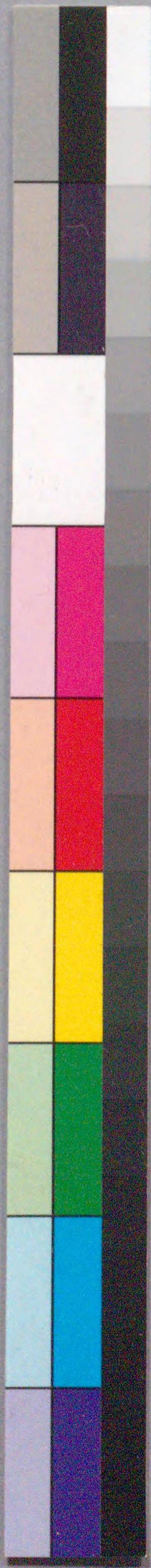
芝野交の曾く禪史小説を好むるが去年秋
表紙の黄なる泉よありむきく上品中本戯文下生
三の巻葉の蓮糸の織物よ長物語の長きうれし
殊を雖然生涯者迹多き中大悲経十六本大佛
縁記の妙作の長自讃佛来よもあるなきこと手
向の線香よ泪のあがりそらしくせんうく
人總と是と抑む 亦全文とらしうみ草及
紙の音は知る者あり是と愁るるわあは彼ら
遺稿の後よ一首の夷歌とあらし傳る

琴の通ふ松ともまら日と
かゝり佛事の餅とけらや

山東京傳







国立国会図書館

百人一首戯講釈：3巻 207-328



ガラス使用

